

子どもたちは生まれた環境を選べない。しかし、その環境に未来を左右されてはいけない。川崎医療福祉大(倉敷市)で先月開かれた子どもの貧困対策フォーラム。約500人を前に同大4年福岡由貴子さん(21)がスピーチした。貧困問題の解決を目指し活動している学生団体「岡山ユースミーティング」の代表だ。

「普通の家庭で育って、先生になろうかなと進学して…。入学した頃はこの場所に立つなんて思ってもいなかった」と振り返る。先輩に誘われ、大学のサークルでひとり親家庭などの児童らを支援する「子どもの居場所」に参加したのがきっかけだった。貧困対策に取り組む全国団体の研修で学び、事故や病気で親を失った遺児らのための「あしなが学生募金」のスタッフ



貧困対策フォーラムでスピーチする福岡さん(21) 4月29日

あかり

子どもの貧困対策訴え

にもなり、多くの当事者の声を聞いた。

例えば同じ年の女子学生。父子家庭で家事を一手に担い、生活苦に耐えてきた。「周りと同じに、普通に生きたい」と踏ん張って大学に入ったが、多額の奨学金を背負った重圧に泣きながら胸の内を明かした。

△この苦しさは一生続くんだろうな▽

身近にあるそんな現実を一つ、また一つ知るにつれ、子どもの6人に1人が貧困状態にあるこの社会への悔しさがこみ上げてきた。

「どれほど悲しいか、生きづらいか。でもいつ、だれが同じ境遇になってもおかしくない」と。

ユースミーティングは2015年から学生らの集いを開き、岡山県などへの政策提言をまとめ、行政や政治家へのロビー活動も行ってきた。その結果、弁護士や社会福祉士、子ども支援団体の関係者らでつくる「岡山子どもの貧困対策ネットワーク会議」が昨春発足し今回のフォーラムが実現した。「若い力が大人たちを動かした」と会議代表の直島克樹同大講師は言う。

次の目標は秋に予定している集い。福岡さんは「行動しなければ何も始まらない。社会を変えるうねりを起こしたい」と思っている。

(井上建吾)